◇ 作品紹介 ◇

一・松永智子

臨書　行書　董其昌『風図詩巻』　全紙

「玉書金簡不足異。布帛菽粟眞文字。委宛驚開先代藏。詩中陣盡繪農双棄事。憶昔。」

初夏書展に引き続き、董其昌の臨書に挑戦しました。一字と全体のバランスについて、深く考えさせられました。美しく鋭敏な彼の書は、見るものを捉えて離しません。明の文人董其昌を、私の、書における軸にできたらと思っています。

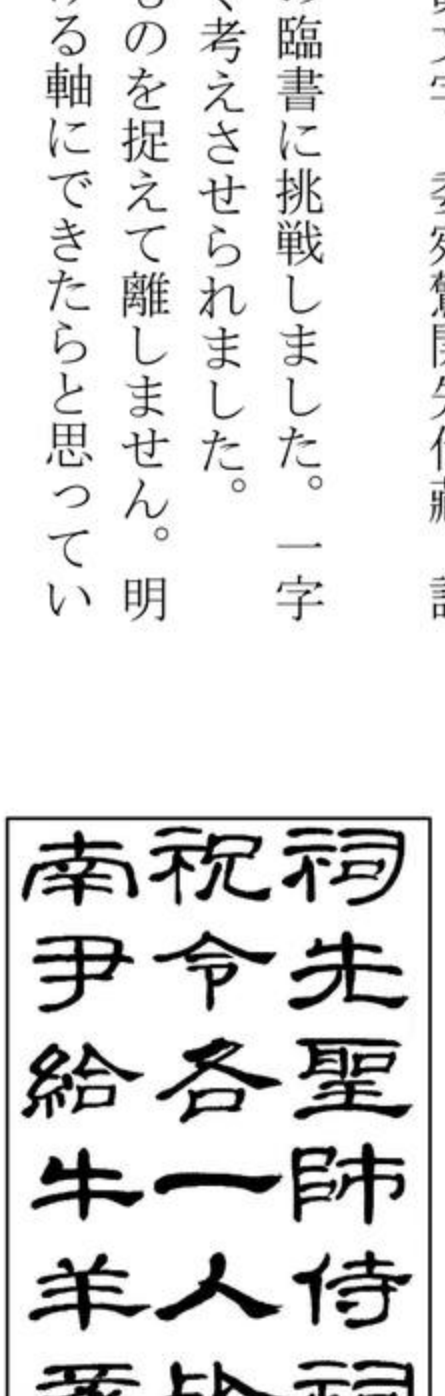


二・稲留直子

臨書　隷書　『乙瑛碑』　半切

「祠先聖師侍祠者孔子子孫大宰大祝令各一人皆備爵大常丞監祠河南尹給牛羊豕各一大司農」

ずっと書いてみたかった隷書に初挑戦しました。波磔に慣れるのが大変でしたが、隷書を書くのは楽しかったです。今回は字を並べることで精一杯だったので、更に練習して、次回は作品として仕上げたいと思います。



三・仲宗根咲子

臨書　草書　張瑞図『五言律詩軸』　半切

「時出碧鶏坊西郊向草堂市橋官柳細江路野梅香傍架斎出秩看題滅薬嚢無人覚来往嬾」

字の癖が自分と全然違うので難しかったです。いろいろ考えすぎて結局崩壊した気がします。



四．大石雅典

臨書　篆書　『石鼓文』　半切

「汧殹沔丞皮淖淵　鯉處之君子漁之　又小魚其斿　帛」

篆書の絵的なおもしろさに惹かれて始めて書いてみました。楷書などとは筆順や筆使いが違うので戸惑いましたが、これを練習したおかげで新しい表現方法を学ぶことができました。ただ、ずれのないように単調に書き続けるのは骨が折れました。



五．河野宏明

臨書　行書　王羲之　『蘭亭序』　半切

「敍幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙之大」

書道歴はまだ半年と短いのでまずは模範的な作品を臨書しようと思い『蘭亭序』を選びました。細かな筆使いなどは一朝一夕では身につかないので、今回は文字のバランスを一番に気をつけました。ただ、まだ蘭亭序の深み、良さが理解できず練習の途中で飽きがきてしまったので、次回は気に入った作品を臨書しようと思います。



六．上原達也

臨書　草書　顔眞卿　『争座位帖』　半切

「高而不危。所以長守貴也。可不儆懼乎。」

久々の作品制作となりました。顔眞卿らしい線の強弱に気を使いながらも、文字の配置や大きさのバランスなどに最初は上手く気が回らず苦労しました。

筆は最初羊毛を使用しておりましたが、上手くその特性を生かすことが出来ず、イタチの毛に切り替えてみました。ご批評のほどよろしくお願いします。



七．廣畠知直

臨書　楷書　『張猛龍碑』　全紙

「以熙平之年除魯郡太守治民以禮移風」

2年前に挑戦した時は凡そ歯が立たなかった張猛龍碑に、今回再び挑むことにしました。動的な均衡による独特の字の構築と、鋭い切れ味の線質の表現を心掛け、文字配置にも面白みを持たせるため試行錯誤を繰り返しました。生命力溢れる書の世界を感じていただければ幸いです。



八．東恵理子

創作　隷書　『いろんな君』　約５０cm×６０cm

「君・君・君」

同じ君。でも、「いろんな君」がいる。

ひと～つ、二人きりじゃないときの外の君、ちょっとだけシャキッとしてる。

ふた～つ、ちょっとワガママな君。投げやりーな感じ。

み～っつ、自然体で包み込んでくれる君。落ち着く。

どれが、どの君でしょう？







九．河合直樹

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』全紙

「百福而長今妙道凝玄遵之莫知其際法流湛寂」

この古典は楷書であるにもかかわらず、一点一画が絶妙なバランスを保っていることで、行書的ともいえる流麗さを備えていると思います。作品制作にあたっては線質にこだわり、奥深い書になるように心掛けました。ご批評の程よろしくお願い致します。



十．白田全弘

臨書　行書　王鐸『行書五律五首巻』半切

「浦雲能自暇逾與道情親況蛩聲光裏高閒似」

宴席で書かれたとされるこの五首巻には、かすれを構わず筆を進めているところが多々見られます。その豪快さに惹かれ今回臨書に挑戦してみたのですが、一字一字の字形に気をとられるあまり全体のバランスが悪くなってしまったので、次回からは気をつけようと思います。



十一．宮原正明

臨書　隷書　鄧石如

『隷書崔子玉座右銘』半切

「無道人之短無説己之長施人愼勿念受施愼勿忘世譽不足慕惟人爲紀綱隱心而」

久しぶりに筆を握りました。一つの作品を作り上げるというしんどくも楽しい過程をまた味わうことができ、やっぱりやってよかったです。

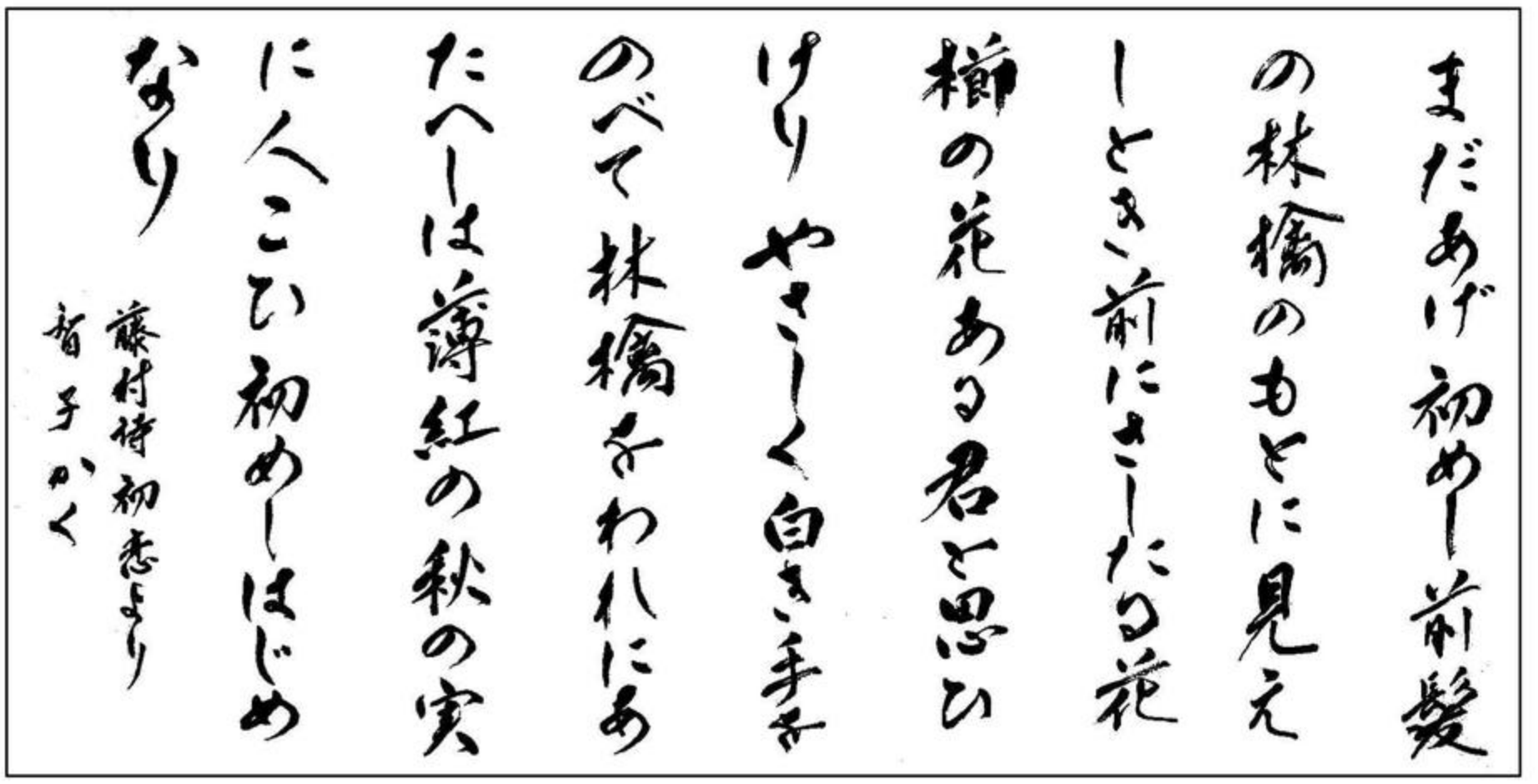


十二．松永智子

創作　調和体　『島崎藤村「初恋」より』　全紙

「まだあげ初めし前髪の　林檎のもとに見えしとき　前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり　やさしく白き手をのべて　林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に　人こひ初めしはじめなり」

秋の想いは、初恋に似ています。初めて調和体に挑戦し、空間の取り方の難しさを痛感しました。しかしまた、表現することの楽しさも味わうことができました。詩、音楽、舞踏、絵画、彫刻……。かずある芸術の中の一つ、「書」で何かひとつの世界を表現できるとしたら、どんなに幸せでしょうか。

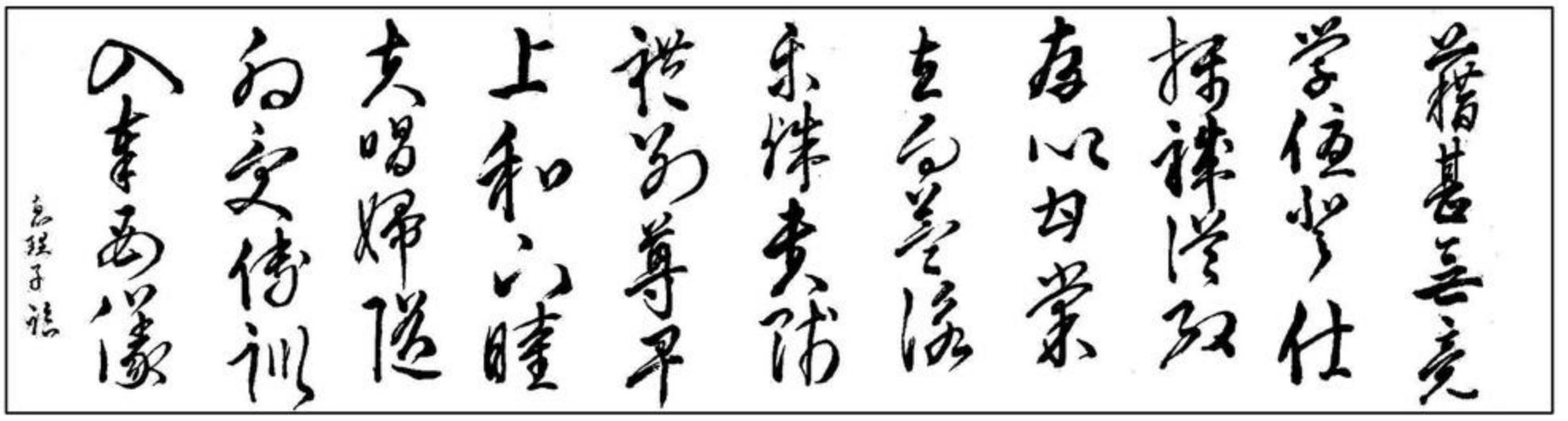


十三．東恵理子

臨書　行書　玉磬山房　『千字文』　半切

「籍甚無竟。学優登仕。摂職従政。存以甘棠。去而益詠。樂殊貴賤。
禮別尊卑。上和下睦。夫唱婦随。外受博訓。入奉母儀。」

半紙以上の大きさの紙に書くのは、約１０年ぶりでしょうか。時は確実に流れています。凸凹な１０年でしたが、私という一貫した個体に訪れ、去っていった、時の流れを表現したいと思いました。





十四．竹倉功祐

臨書　隷書

『敦煌漢簡』　二尺×六尺

「急就奇觚與衆異羅列諸物名姓字分別
部居不雜廁用日約少誠快意勉力務之
必有憙請道其章宋延年」

半切よりも大きい作品を書くのはこれが初めてです。

また今回初めて、ただ原本に従うだけでなく作品全体の統一感というものも意識して、自分なりの作品を作ろうと試みてみました。



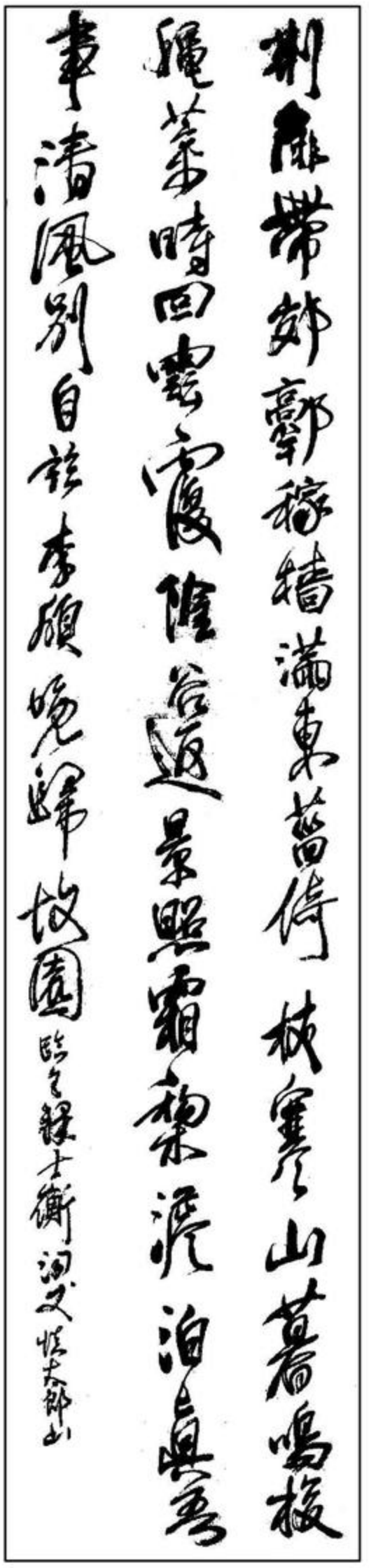
十五．原山大輝

臨書　行書　王羲之

『興福寺断碑』　二尺×六尺

「剛如鐵操緊明霜酌龍豹之神韜之策名溢
寰海功埤動植其誰由然哉惟」

この作品は最初に見たときに受けた印象よりも、一つ一つの字のバランスをとるのが大変でした。



十六．窪田慎太郎
臨書　行草　王鐸　『李頎晩帰故園詩』　二尺×八尺
「荊扉帯郊郭稼穡満東蕃倚杖寒山暮鳴梭秋葉時回雲覆陰谷返景照霜梨澹泊眞吾事清風別自茲李頎晩帰故園」

大きい作品に初めて挑戦してみました。二八を書く時は王鐸を、と考えていたので実行してみたのですが、字が揺れて流れているのにバランスをとって作品にする、ということに苦労しました。また原本通りだと大きさが違うので、二八の紙にうまく並ばないところを変化させて作品にしてみました。もう少しきれいに流れさせたかったところですが……。



十七．橋本充悠
臨書　行書　鄭燮　『論書』　二尺×八尺
「平生愛學高司寇且園先生書濃而且園實出于坡公故坡公書為吾遠祖也坡書肥厚短悍不得其秀恐至于蠢故又學山谷書飄ゝ有欹側之勢風乎雲乎」

揚州八怪の一人である鄭燮の作品に挑戦しました。字形や全体としての調和を心がけました。

十八．三幣剛史

臨書　行書　王鐸

『徐嶠之臨書』　一尺×八尺

「春首餘寒閣梨安隠動正弟子虚乏謬承榮寄蒙恩奬擢授　一歳三遷既近都邑弥深忝竊戦懼之情弟子徐嶠之」

鋭い線と細い線とが目立っていますが、それらがにじみとうまく調和しているのに心惹かれ、臨書してみようと思いました。一見王鐸の作品とは趣を異にするのですが、次々とつながる連綿や筆のリズムはやはり王鐸の手になるもので、見ても気持ちのいいものでした。なかなか真筆に近づけずもどかしい気持ちになることもありましたが、何とか作品と呼べるくらいにはまとまったかなと思っています。



十九．砂川祐子

創作　行書　張華『雑詩』　聯落

「晷度随天運四時互相承東壁正黄昏中涸陰寒節升繁霜降當夕悲風中夜興朱火青無光蘭膏坐自凝重衾無暖氣挟纊如懐冰伏枕終遥夕寤言莫予應永思慮崇替慨然獨拊膺」

いつか「自分の字」で、作品を完成させることが、私の書道における目標です。その一歩を、今回の作品で踏み出してみましたが、これが想像以上に難しく、苦戦を強いられました。この作品は、現時点での「自分の字」の記録です。いつになったら、目標は達成されるのか…模索はまだまだ続きそうです。



二十．東恵理子
創作　隷書『黄葉樹』　半切1／2



秋を感じた身体で、素直に自然に紙に向かったところ、こうなりました。京都の葉っぱを使いました。

二十一．團子正則
創作　草書『澹泊明志　寧静致遠』　半切対聯

「澹泊（たんぱく）にあらざれば、もって志を明らかにすることなく、寧静（ねいせい）にあらざれば、もって遠きを致すことなし」（諸葛孔明「誡子書」の一節より）

「無欲でなければ志は立たず、穏やかでなければ道は遠い。」
小さい頃に抱いた〝夢〟を〝いつしか忘れていくことが「大人」になることで、端から見れば他愛のないものをいつまでも大事に抱き続けるのは「子ども」なのでしょうか。
それが真実であろうとなかろうと、せめて「澹泊」と「寧静」は自分の中に持ち続けたいものです。



二十二．鳥越亜希
臨書　行草　何紹基『行草山谷題跋語四屏』　半切
「荊州沙市舟中久雨初霽開北軒以受涼王子飛兄弟來過適有田氏嘉醞問二客皆」

素朴な感じが気に入り書こうと思いました。実際書いてみると思うようにはいかず、でもそれ故に書き応えがありました。一枚一枚書くたびに面白かった作品です。

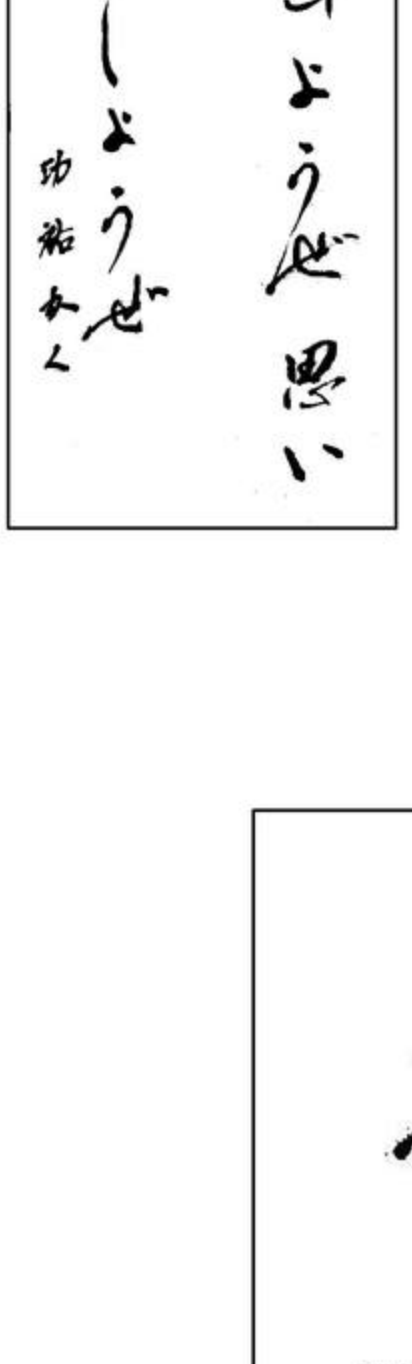
二十三．木村圭祐
臨書　楷書　『鄭長猷造像記』　全紙
「太守護軍長史雲陽伯長猷為亡父一軀敬造弥勒像鄭長猷為母」

この古典の素朴で野趣溢れる雰囲気を表現したくて臨書しました。全体の字の配置や崩れかかったような独特の字形に気を配りました。しかし線質などでもう少し遊ぶべきだったような気がします。もっとがんばりたいです！

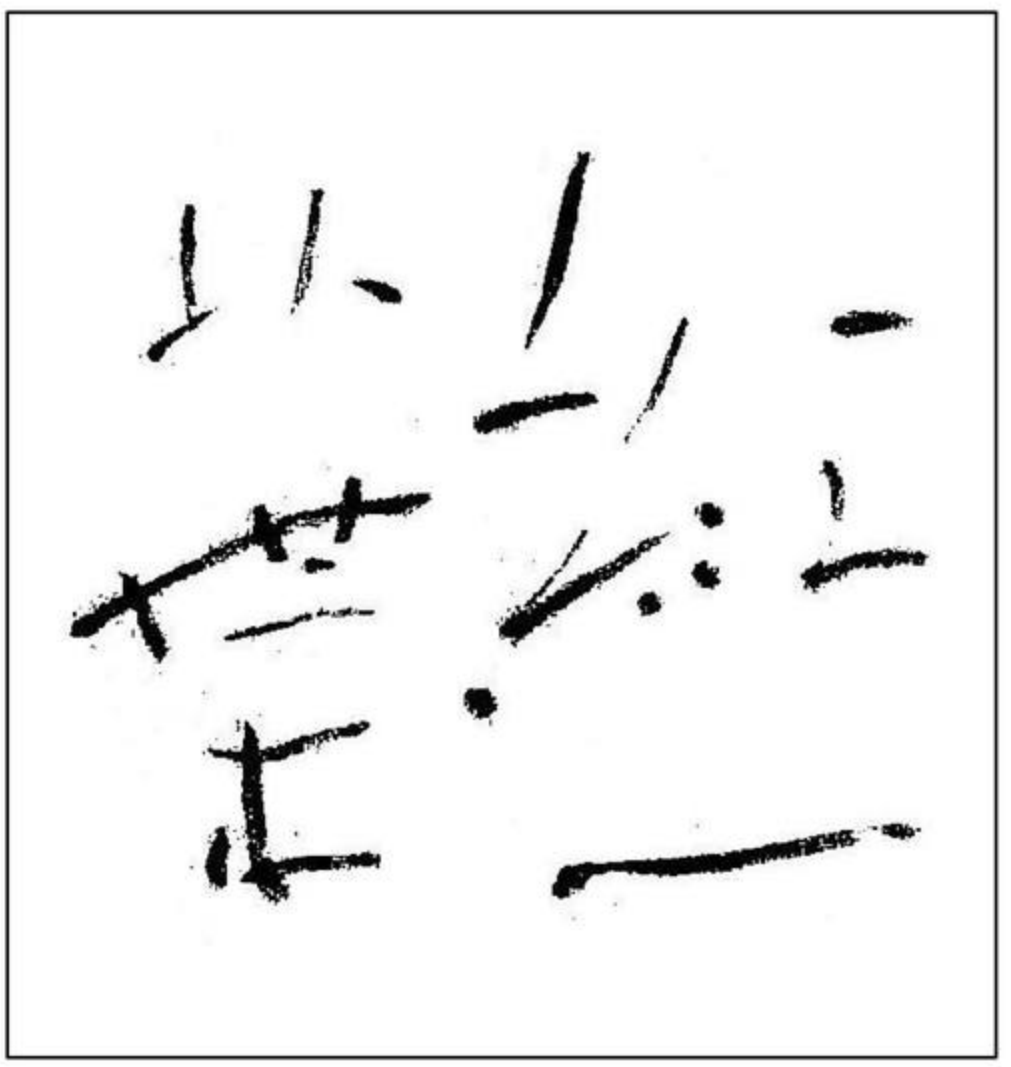


二十四．竹倉功祐
創作　調和体　『ばらの花』　半切
「安心な僕らは旅に出ようぜ　思い切り泣いたり笑ったりしようぜ」

くるりの「ばらの花」（岸田繁作詞、作曲）という歌の一節からとりました。この歌を聴いていると、嬉しいような悲しいような、ほっとするような切ないような、なんとも不思議な気持ちになります。
見る人の心にそんな気持ちを届けることができる「うた」にしたかったのですが、まだまだ先は遠いようです。次に向けて精進します。



二十五．中原初実
創作　楷書　『紅一葉』　半切1／3
穏やかな秋の風景、うまく表現できているでしょうか？





This book was
made by the LeME